

統合失調症に対するオンライン認知行動療法（CBTp）の社会実装に向けて



【千葉キャンパス】健康医療スポーツ学部 リハビリテーション学科
作業療法コース 准教授

勝嶋 雅之 Katsushima Masayuki

URL : [帝京平成大学 教員業績紹介ページ](#)

キーワード : 統合失調症・リモート・認知行動療法・アクセシビリティ



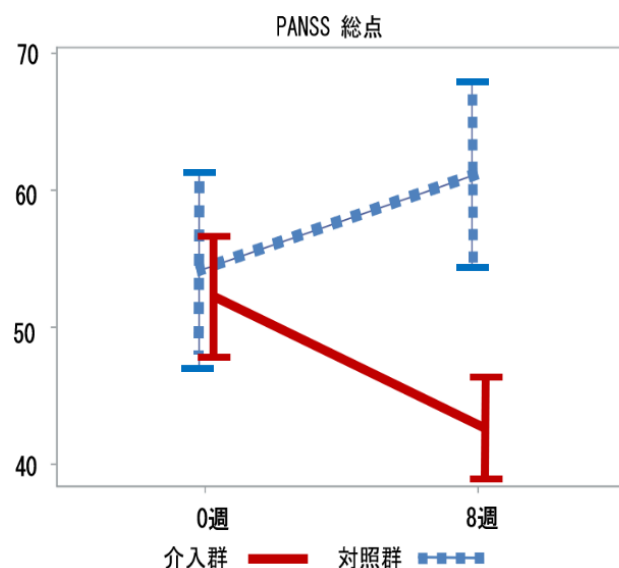
研究の概要

SDGs 目標 3：すべての人に健康と福祉を

本邦では統合失調症に対する臨床治療は薬物療法中心であり、欧米と比較して統合失調症に対する認知行動療法（Cognitive Behavioral Therapy for Psychosis: CBTp）の国内の研究エビデンスは少ない（Katsushima et al. 2024）。CBTp により疾病理解や服薬認識の改善および、ストレス対処能力の向上の可能性も示唆されている（Tarrier et al. 1993）が、国内ではCBTpのセラピスト養成の体制や受療できる施設が乏しい状況であるため、統合失調症の患者がCBTpの受療にたどり着くことが現状、困難である。また遠隔地や過疎地域に居住する患者ほど身体的・精神的・経済的なアクセス負担を伴うことも推察される。今回、患者宅と病院のセラピストをオンライン接続して遠隔CBTpの介入をおこなうことで、精神症状に改善が見られるかどうかをパイロット RCT で検証した。

本研究（UMIN000043396）では千葉県の基幹病院と連携して、外来で薬物療法を受けていて、なおかつ、陽性症状が存在する統合失調症の患者に毎週1回50分で7回のオンラインでの遠隔個人認知行動療法を実施する群と、外来通常治療のみの2群間を比較した。アウトカムは統合失調症の世界標準の評価尺度である陽性・陰性症状評価尺度（Positive and Negative Syndrome Scale: PANSS）のベースラインから8週時点の変化量とした。PANSSは陽性症状を7項目で、陰性症状を7項目で、また、その他に、不安や抑うつなどの総合的な精神病理を16項目で評価する合計30項目からなる総合的に統合失調症を評価する尺度である。

今回のRCTで介入群では試験開始時の平均52点から8週間後には平均43点まで改善するなどいずれの領域でも有意な差がみられた。



実学へのつながり・産業界や自治体へのアピールポイント・協力可能事項・協力希望事項

今回の研究では遠隔でのCBTpにより症状への改善効果や、外出が困難な患者でもオンラインでCBTpを受療する安全性が確認できた。しかし統合失調症の症状は患者によって多様であり、CBTpがどのような症状の患者に効果があるのか、という点までは明らかになっていない。そこで筆者らは、統合失調症の患者に社交不安症の併存が多いことや、対人ストレスが陽性症状を強める契機となることから、発展研究として社交不安を持つ統合失調症の患者へのオンラインCBTpを開発中であり、社交不安を標的としたCBTpを研究予定である。

知的財産・論文・学術発表など（詳細は右上QRコードの教員紹介からご確認ください）

【論文】

「Effectiveness of a Videoconference-Based Cognitive Behavioral Therapy Program for Patients with Schizophrenia: Pilot Randomized Controlled Trial」

【科研費】

（基盤研究C）：「統合失調症の外来患者に対する遠隔認知行動療法プログラムの開発とその有効性の検証」

（基盤研究C）：「社交不安を持つ外来統合失調症患者に対する遠隔認知行動療法プログラムの開発と検証」